

令和6年度入学式式辞

今年も春が巡ってきました。春とはまさに希望の季節、そして新たな生命（いのち）が芽吹く季節です。その季節にご来賓の方々や保護者の皆様にご臨席いただき、三十九人の新たな仲間、すなわち新たな希望そして生命（いのち）を迎え、鹿児島県立与論高等学校第五十八回入学式を挙行できますことは、私たち教職員にとってこの上ない喜びであり、厚く御礼申し上げます。与論高校は今日から、在校生も含めたこのメンバーで走り始めます。新入生の皆さん、まずは入学おめでとう。義務教育を終え、希望すればその他の学校に進学する選択肢もある中で、本校への進学を決断してくれたことを私たち教職員は嬉しく思うとともに、みなさんを預かる責任感と使命感を新たにしています。

さて、本校は、町民の方々の切なる願いの下に、昭和四十二年、県立大島高等学校与論分校として開校しました。昭和四十六年には県立与論高等学校として独立し、これを機に校章や校歌などが制定されました。

平成十二年には与論中学校との連携型中高一貫教育校の指定を受け、新たな歩みを刻みながら、一島一校の高等学校として、その役割を確実に担ってまいりました。

令和となった新しい時代においても、よき伝統と爽やかで落ち着いた校風を継承しています。その本校で、新入生のみなさんが勉学や学校行事などに真摯に取り組み、充実した高校生活を送ることを期待します。

ところで、生成AIをはじめとする人工知能が急激に進化し、グローバル化が進む混沌とした社会では、様々な事象が複雑さを増し、変化の先行きを見通すことが一層難しくなっています。そのような時代を生き抜いていくみなさんに求められるのは、正解のある問題を早く正確に解いたり、定まった手順を効率的にこなしたりすることだけでなく、よりよい未来や新たな価値観の創造に向けて、自ら課題を発見し、知識や情報を活用しながら、多様な人々と協働して取り組んでいく力です。

大学入試や就職試験などに合格することが勉強のゴールではなく、その後の人生を主体的に生き抜くために自ら学び続ける力の土台を作ることが高等学校までの教育の重要な役割です。その土台となる力を育成するために、本校は全職員が一丸となって取り組んでまいります。

その本校では令和二年度から、「予測が困難な時代を主体的に生き抜く力を持った生徒を育成する」ことを重点目標に掲げ、教育活動の充実・改善を図っています。本校はこの重点目標の「予測が困難な時代を主体的に生き抜く力」を次のように捉えています。

それは、「学ぶことの意義を理解し、未知の状況の中で、正解のない問いに対しても、よりよい解決策を見出すために、多様な人々と協働しながら、粘り強く取り組もうとする力」です。

体育館前方の右上に、本校の校訓「好学・創造・親和・不屈」を掲げています。この校訓は、先ほど述べた「予測が困難な時代を主体的に生き抜く力」に重なっています。

つまり、「好学」は、学ぶことの意義を理解することから始まります。「創造」は、未知の状況の中で、正解のない問いに対しても、よりよい解決策を見出すこと。「親和」は、多様な人々と協働すること。「不屈」は、粘り強く取り組もうとする力を意味します。

すなわち、本校の校訓「好学・創造・親和・不屈」は、これからの時代を生きる若者に必要とされる「予測が困難な時代を主体的に生き抜く力」を表すキーワードそのもののなのです。

本校の草創期に校訓をつくった先達は、未来でも変わらずに必要なとされる資質・能力を見据えていたと言っても過言ではありません。その校訓を具現化すべく、新入生のみなさんがたくましく成長することを願っています。

さて、私は教師になって、今年で三十四年目になりますが、どんなに時代が変わっても、どんなに学び方が変わったと言われても、結局大切な力は昔も今も変わらないと思っています。その力とは、「自分の頭で考え」それに基づいて自分の責任で行動するということです。これまでに出会った数多くの印象的な生徒の中から、一人を紹介します。

私が教頭時代、校舎の鍵を開け、簡単な清掃をしていたときのこと。一人の女子生徒が、「私にも手伝わせてください」と近づいてきました。彼女が吹奏楽部員で個人練習のために朝早く登校していることを知っていた私は、「自分のために時間は使っていないんだよ」と言って、断りました。しかし、どうしてもということ、その日から毎日、私と彼女は早朝、校舎の清掃をすることになりました。しばらくたった頃、私は彼女に、「どうして掃除を手伝おうと思ったの？」と聞いてみました。彼女は、「掃除をすることで自分にどんな変化が生まれるかに興味を持った。毎日掃除をしていると、校舎のどこが汚れやすいに気が付く。そうするとどの部分に気をつけて掃除すればよいかわかる。それは、例えば数学で、何に気をつけて計算すればよいか、英語の読解でどこに気をつけて読み進めればいいのか、そういうことを考えて勉強することと同じだということがわかった」と言ったのです。私はこのとき、自ら主体的に始めた清掃という日常の何気ない行動の意味を、日々の学習に結びつけられる彼女の思考力は、大学入試の総合型入試や推薦入試で十分に堪えうるものだと感じました。一年後、彼女は実際に、国立大学の総合型入試に現役で合格していききました。このように、「自分の頭で考え」、行動を起こしてみても、自分がどのように成長するかを毎日ワクワクしながら過ごすような高校生活を送ってほしいと思うのです。

最後に、もう一つお伝えしたいことは、「自分のルーツに誇りを持つ」ということです。与論島にルーツを持つ自分に誇りを持って、ということ、私はこれまでの教師生活の中で、鹿児島市内の全校生徒千人規模の大規模校三校で教師として勤めた経験があります。もちろんこのような学校では、人数が多いですから、体育祭や文化祭の迫力やエネルギーはもの凄いのがあります。しかし、日常の授業等の教育活動については、千人もの生徒が同様に一斉に受けるものですから、珍しさ・貴重さという点ではありふれたものになってしまいうらいがある。それに対して、本校はどうでしょう。本年度でいえば、新入生を含め、126名しか受けられないわけです。他の地域とは明確に異なる自然や文化が色濃く残る、一島に一校しかないこの与論高校で、126名しか受けられない教育コンテンツの方が、千人もの人が均一的に受けるものよりも希少価値があると考えられないでしょうか。それを受けた生徒の皆さんの存在価値そのものも上昇するという発想を皆さんには持つてほしいということです。

皆さんの高校生活が魅力的になるかどうかは、「皆さんが日々の生活や地域の、身近な他者や自分の、これまで気付いていなかった魅力やねうちを発見し、その意味を読み取り、その認識を基にして自分の将来に向けて、いま取り組んでいけるかどうか」にかかっているのです。島の外から島を眺める視点を持てば、同じ日本人でもこの与論島で育った自分達がどれほどユニークな存在であるかわかると思います。ですから、家庭や学校だけに閉じこもり、家族や友人・先生達とだけ接するのでは

なく、外の世界に飛び出して、新たな人との出会いも積極的に求めてほしいと思います。

保護者の皆様、お子様のご入学を心から歓迎いたします。今、皆様の心の中に浮かんでいるお子様は、いつ頃のお子様でしょうか。生まれたてでまだ首も据わっていない頃、タオルにくるんで恐る恐るお湯の中に浸けていたあの頃でしょうか。夜中に高熱を出し、泣きじゃくる我が子を、どうすることもできず、ただ抱っこしてあやしていたあの頃でしょうか。それとも、思春期になり、生意気に文句を言って、親である自分に初めて反抗してきたあの頃でしょうか。そんなお子様がこんなにも大きく成長しました。そして、この与論高校で、さらに大きく成長します。この子どもたちが生きていく時代は、「人生百年時代」、「AIの時代」、「超高齢化社会」、そして「二十世紀」。これまで誰も経験したことのない、さらにはモデルとすべき生き方もない、そんな社会です。そこに私たち親や教師は既に不在であり、助けてあげることできません。だからこそ本校は、「予測が困難な時代を主体的に生き抜く力を持った生徒を育成する」ことを重点目標に掲げ、教育活動の充実・改善を図って参ります。「与論高校で学んでよかった」と実感していただけるよう全力で支援します。生徒たちには、「大きな子ども」ではなく、「小さな大人」として接して参ります。

そのためにも学校と家庭がそれぞれの役割を果たし、連携を密にすることが重要であると考えます。保護者の皆様におかれましては、本校の教育方針について御理解いただき、御協力をお願いいたします。

終わりに、新入生のみなさんの活躍を心から期待するとともに、本校の教育活動に対し、日頃から温かい御理解と御支援を頂いているすべての皆様に感謝を申し上げ、式辞といたします。

令和六年四月九日

鹿児島県立与論高等学校
校長 大倉 秀心